

総合的な探究の時間の

カリキュラム・教材・評価の開発と実践

岡本 弘之

アサンプション国際中学校高等学校

1. 研究の目的

本校では、2017年度より週1時間の探究科の時間を設定し、運営する組織、カリキュラム立案・授業の企画・実践、評価方法を開発・実践してきた。本研究では、2022年の学習指導要領改訂による「総合的な探究の時間」実施に向けて、本校の4年間の実践を整理・分析・評価し、「総合的な探究の時間」を成功させる工夫について考察、教材を共有するを目的とする。

2. 研究の背景

2.1. 本校での探究科設定の経緯

本校では以前「総合的な学習の時間」で学級担任が進路をテーマに週1時間の授業を行ってきた。この方法は生徒や学年の実態に合わせて授業を行うことができる一方、担任の授業準備の負担や毎年担当者が異なり授業の深化が見られないなどの課題が生じていた。

また本校では2017年度より共学化と共に21世紀型教育の導入を目的とする学校改革を行い、週1時間の「総合的な学習の時間」を教科化し、PBL型の探究科の時間を2017年度の高校1年生より実施することとなった。以降2018年に高校2年生まで、2019年には高校全学年で週1時間の探究科の授業を実践している。

2.2. 総合的な探究の時間の目標

2022年度から高等学校で実施される新学習指導要領では従来の「総合的な学習の時間」に代わり「総合的な探究の時間」が設定される。同時間の目的として「探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよ

く課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とあり、探究における生徒の学習の姿のモデルとして図1のようなモデル図を示している。

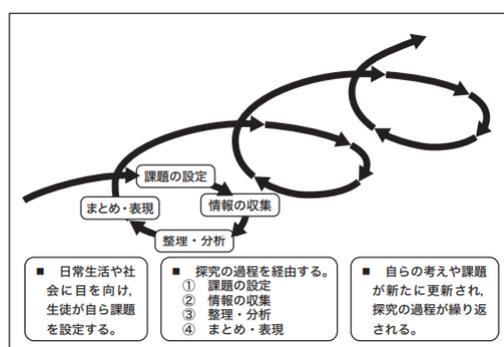


図1 探究における生徒の姿

探究の時間のモデルとして「課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ」を繰り返しながら生徒が成長していく姿を現している。

本校の実践は当初から「総合的な探究の時間」を意識した内容としているが、実施組織・カリキュラム・評価において独自の工夫を加えている部分も多い。本稿はこの3点を中心に4年間の実践を紹介し、考察していく。

3. 探究科の実践内容

3.1. 探究科の実践組織

探究科の実践に向けて、2016年度に公募でプロジェクトチームを立ち上げ、私と若手国語科教員の2名が担当となった。この2名で高校3年間の授業内容・カリキュラムを考え、2017年度はこの2名が主担当となり、他の教員とともにTT(ティームティーチング)で授業を行った。2018年度以降はさらに2名(社会科・美術科)の教科員を加え、現在もこの4名を主担当者としてTTで授業を展開している。

3.2. 探究科のカリキュラムデザイン

探究科では世界や日本の社会問題について、自分でテーマを設定し、高校3年生で卒業論文にまとめることを目標とした。この目標に向けて必要な要素としてSDGsなど国際問題の知識と、論文を書くためのアカデミックスキルを習得させる3年間のカリキュラムを考えた。(図2)



図2 カリキュラムイメージ

修得させるべきアカデミックスキルについては、大学の初年次教育のテキストや先行事例から、下表のように具体的にリストアップした。

知識を得る	講演 映像 本・Web 他者の考え
課題を考える	質問 論題・仮説の立て方
情報を収集	図書館の本 インターネット 問い合わせ インタビュー アンケート
情報を整理	イメージマップ プレゼンテーション 思考ツール 付箋・KJ法 マッピング
まとめる	模造紙 レポート 作文・論文 新聞 グラフ・表
発表する	スピーチ プレゼンテーション デイバート ポスターセッション パネルディスカッション

図3 目指したアカデミックスキル

3.3. 各学年の授業内容

(1) 高校1年「学びのスキル」の獲得

1年生では「学びのスキル」獲得をテーマに、情報を整理・要約・発表するスキルと、世界や日本の社会問題についての知識をつけることを目的とした。1学期は「情報を整理する」「まとめる」「表現する」というスキルを中心に、2学期以降は世界や日本の社会問題についてのテキストを全員が購入し、本を読んでまとめて発表するワークを複数回行うことで基礎知識と発表スキルの習得を目指した。

学期	プリント	内容
1学期	No.1・2	情報を整理し文章でまとめよう
	No.3・4	情報を要約しよう
	No.5・6	ディベートをしよう①
夏休み	No.7	本を読もう
2学期	No.8	問いを立てよう
	No.9	平和問題を話し合おう
	No.10・11	ポスターセッションをしよう
	No.12・13	レジュメを使って発表しよう①
3学期	No.14	表・グラフを読み取ろう
	No.15・16	レジュメを使って発表しよう②

図4 高校1年のカリキュラム内容

(2) 高校2年「Think Globally, Act Locally」

1学期は1年生の学びの続きを行い、2学期は自分たちでプロジェクトを提案し実行・評価する活動を行った。(初年度はチャリティイベントの企画、2年目はエコバッグの企画・販売を行った。)3学期は卒業論文制作に向けて文章の制作や論文のテーマ決めに充てた。

学期	プリント	内容
1学期	No.1・2・3	ポスターセッションで発表しよう(調査・発表)
	No.4・5	ディベートをしよう
夏休み	No.6	JICAフィールドワーク
2学期	No.7	プロジェクトを企画しよう(企画・提案)
	No.8	プロの話を聞こう(講演)
	No.9・10	プロジェクトを作ろう(企画・発表)
	No.11・12	プロジェクトを実行・評価しよう(実行・評価)
3学期	No.13-16	論理的に文章を書こう
	No.17-18	卒業論文のテーマを決めよう

図5 高校2年のカリキュラム

(3) 高校3年「卒業論文」の制作

1学期前半は卒業論文のテーマを調べレジュメで発表しテーマの再考を行った。ここでもらった意見も踏まえ後半に論文制作を行い1学期末を1次提出の期限とした。2学期は教員の添削・アドバイスを返し、文章を推敲、2学期前半に最終提出とした。後半は論文内容の共有のためポスターを作成し、ポスターセッションでお互いの論文の内容を発表・評価しあった。

学期	プリント	内容
1学期	No.1・2	論文テーマをレジュメで発表し改善しよう
	No.3・4	論文を書こう(制作・発表・振り返り)
	7月	論文の1次提出
2学期	No.5	論文を書きなおそう(修正・提出)
	10月	論文の2次提出
	No.6・7	論文ポスターセッションをしよう(発表・評価)
	No.8	論文を要約しよう

図6 高校3年のカリキュラム

3.4. 授業デザインの工夫

探究科の授業では、講義型の授業ではなくPBL形式で授業を行うこととし、次のことを意識して授業デザインをした。

(1) 深い学びを実現する

深い学びの実現には、認知心理学では「内化→外化→内化」の手順をたどることが有効とされる。具体的には意見交換では「言うことを考える(内化)→意見交換で発表、他の人の意見を聞く(外化)→もう一度自分で考える(内化)」のプロセスをたどることで、最初よりも自分の考えを深めることができる。授業の話し合いや発表では、この手順を意識してたどらせることで深い学びの実現を目指した。

(2) 学びの仕掛けを作る

授業形式としては教師が知識を教え込む講義形式ではなく、発表などアウトプットするために調べたりまとめたりすることで知識を得て、またお互いの発表を聞くことでさらに知識を得ることを意識した。アウトプットするためのプロセスで知識をインプットする授業である。

(3) 生徒同士の共有の中で学ぶ

お互いの発表を聞くことで、その内容から新たな知識を、方法では書き方やまとめ方の上手な例を他の生徒に紹介することで学ぶということも多く実施した。例えば「要約する」という課題では、上手な生徒の作品を途中段階でも見せながら学ばせるなどである。



図7 ポスターセッションの様子

3.5. 評価の工夫

(1) プロセスも評価する

評価材料は発表や成果物だけでなく、学びの

プロセスも評価するようにした。具体的には途中段階もこまめにワークシートに記録させ、その内容を点数化して評価に組み込んだ。

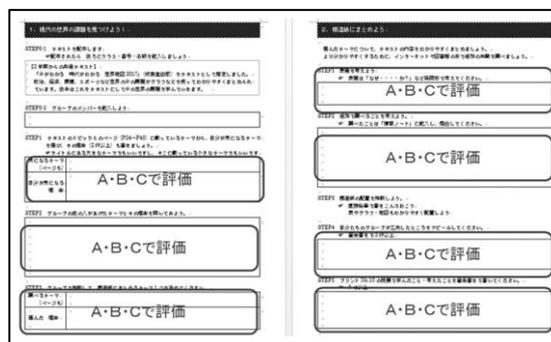


図8 プロセスを記入するワークシート

(2) ルーブリック評価で生徒と基準を共有する

ワークシートや発表の評価項目・基準についてはルーブリック評価とし、生徒と共有した。生徒と目標を共有することで、生徒にとって納得できる評価をめざした。

(3) 点数で評価する

「総合的な学習の時間」では点数評価ではなく文章で評価を行うとされ「総合的な探究の時間」でも同じである。しかし本校では他の教科と同じく点数で評価を行うこととした。点数評価を行うことで、自分の頑張りや足りないところを意識でき、「点数を上げよう」とモチベーションの向上が期待できるからである。

4. 考察

4.1. 探究を教科化したことの効果

探究科を担当する教員を固定し教科化したことは、実施母体を明確にし、自然と授業内容の改善・深化が行われる効果があった。また学年間の連携・引き継ぎもスムーズで、前年度の積み重ねをふまえて授業を行うことができた。ITで他教科教員も巻き込むことで、絶えず他教科との教科内容の連携も意識するようになった。

4.2. カリキュラム・授業内容の評価

高校3年間の探究科の目標を卒業論文に設定しているが、年々そのテーマ・内容も進化している。図9は2021年度の卒業論文のテーマで

あるが、テーマの内容もバラエティに富み、生徒が自分事として問題をとらえたものも多い。

テレビは今後生き残れるか？
筋トレは精神も鍛えることが可能か？
児童虐待を減らすことは可能か？
自己肯定感を短期間で高めることは可能か？
日本アニメは海外で人気があるのか？
海洋プラスチック問題を解決することは可能か？
日本の自殺者は減らすことができるのか？
健康を維持するための食事は1日3食が最適か？
世界が水を使い続けることは可能か？
LGBT差別をなくすことは可能か？

図9 2021年度論文テーマ抜粋

次に2021年度高校3年生51名を対象に授業の最後のアンケートの結果から見ていく。

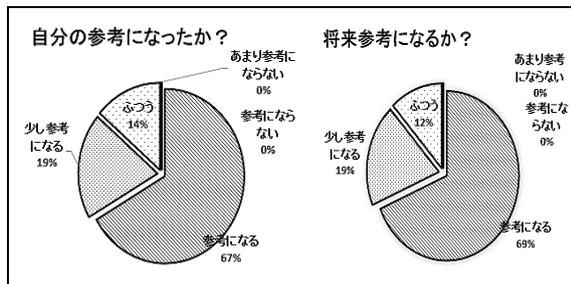


図10 生徒アンケート結果

3年間の探究科の授業について、「参考になったか?」、「将来参考になると思うか?」についての回答が図10になる。いずれも85%以上の生徒が「参考になった」、「将来参考になる」と回答しており、生徒は「参考になる」と実感しながら授業に取り組んでいたことがわかる。

次に同アンケートの「授業で学んだこと、思ったこと、考えたこと」についての自由記述をテキストマイニングで分析する。

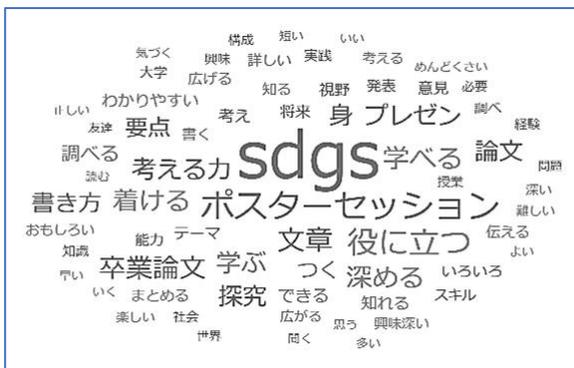


図11 自由記述のテキストマイニング分析

「SDGS」といった知識の内容、「論文」「プレゼン」「ポスターセッション」といった発表の経験、「学ぶ」「役に立つ」「身に着ける」といった認識、「深める」「考える」といった思考の言葉

が目立つ。探究科の授業の中の様々な活動を通して、生徒は「考える」「深める」経験をしたことが自由記述から伺える。

4.3 評価について

評価項目・基準をルーブリック評価で共有し、点数評価としたことは生徒のモチベーション向上につながった。評価観点を意識しそれが点数という結果につながることで、「さらに良い点を取ろう」と授業への取り組みも向上した。評価への納得度も生徒の約70%が「ちょうどよい」と回答し、「高い」「少し高い」も約20%あった。生徒も納得する評価であったことがわかる。

5. まとめ

本校が4年間実践した探究科の効果は、

- ①教科化し担当者を固定することで、授業内容の改善や深化や他教科への波及があった
- ②卒業論文をゴールに知識・アカデミックスキルを獲得するカリキュラムデザインは、生徒自身が自ら学んだと実感でき、また「役に立つ」と感じる内容だった。
- ③評価をルーブリック評価で基準を共有し、点数評価を行うことは、目標や弱点が明確になり生徒の意欲・力の向上につながった。という3点にまとめられる。

また4年間の取組で開発・実践した本校の教材は、これから

「総合的な探究の時間」を行う学校向けに私個人のWebページ



で公開し共有できるようにしている。（「探究の授業アイデア」<https://www.okamon.jp/tankyu>）

<参考文献>

文部科学省, 2018, 『高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』
 後藤芳文・伊藤史織・登本洋子, 2014, 『学びの技』玉川大学出版部
 田村学・廣瀬志保編, 2017, 『「探究」を探究する』学事出版